

糟屋地区の仏像について(その2)

先月に引き続き、糟屋地区の仏像を紹介しします。

◎糟屋地区北部の仏像群

糟屋地区北部に位置する古賀市には、大日如来坐像と阿弥陀如来坐像が、また新宮町には、伝教大師伝説が残る千年屋(重要文化財)に毘沙門天や口開け観音像が祭られ、玄界灘に浮かぶ相島では吹上観音像が島民に親しまれています。

◎特筆すべき仏像

糟屋地域には、滑石の露頭が各地で見られます。この滑石で造られた



木造阿弥陀如来坐像(糟屋の祈り)から

仏像に、宇美町の如来立像があります。この仏像は、宇美町の「筑前国四王寺経塚出土品」(重要文化財)の一部に含まれますが、平安時代後期に造像されたもので、光背から台座まですべて一石

から掘り出されていて、その穏やかな尊顔は、その仏像近くから出土した経筒(1119年銘)を見守るようにも見えます。また、須恵町の佐谷神社にも滑石製の菩薩形坐像が伝わります。

◎糟屋地区の特徴

中世以降は、伝教大師や弘法大師の伝説が各地に残る糟屋地域では、それに伴う形で、多種多様の仏像が生み出されます。また近世には、道教思想に始まる民間信仰に深くかかわる青面金剛像なども新たに加わります。

◎最後に

糟屋地区の仏像は、その材質においてこの地域に密着していることが、滑石の産出地の点在や、前述したとおり造像に適した木材がこの地域に古くから自生(もしくは植林)していたことからも分かります。

※出典…「糟屋の祈り」